

## 第IV部門 明治期の大阪大川納涼場と市内遊所とのつながり

関西大学環境都市工学部 ○学生員 山口 匡輝  
 関西大学環境都市工学部 正会員 林 倫子

### 1. はじめに

#### (1) 研究の背景と目的

近年は、かわまちづくりやミズベリングなどの水辺を活用した活動が全国で展開され、まちづくりに応用しようとする事例が増えつつある<sup>1)</sup>。魅力的な水辺都市の創造のためには、水辺に多様な主体が参入できる社会を創造することが重要であり、視覚のみならず様々なつながりにおいて水辺と都市との関係を構築する必要がある。

水の都として栄えた近世大阪では、『淀川兩岸一覽』<sup>2)</sup>などに見られるように、水辺が周辺市街地と一体的かつ多様に利用されていた。その象徴とも言えるのが、三都納涼の一つに数えられる大川納涼である。江戸の明暦年間から始まったとされ<sup>3)</sup>、その賑わいは明治終わり頃まで続いたのではないかと推測される<sup>4)</sup>。特に大川兩岸と各橋上の納涼店、そして水面を埋め尽くすほどの納涼船による舟遊びの情景が知られ、現在の大川に架かる天神橋から堂島川・土佐堀川に架かる難波橋の間が、特に賑わいの中心であったとされる<sup>5)</sup>。大川納涼については、一時期開催した天神橋・難波橋間の中洲納涼場の営業実態を明らかにした既往研究<sup>6)</sup>はあるが、大川納涼と都市との関係に着目した研究はなく、大川納涼場と市内遊所とのつながりを明らかにする必要がある。

そこで本研究では、水辺の娯楽空間である大阪大川納涼場を含む社会を描き出すために、堀川を介した大川納涼場と市内遊所とのつながり(2章)、大川の納涼客の遊び方(3章)を明らかにすることを目的とする。

#### (2) 研究手法

本研究では、大阪朝日新聞を資料として主に用いる。このため、おのずと明治期が調査対象期間となる。多数の郷土研究の指摘するように、大川納涼の文化は明治期にも残っていた。閲覧した記事は、同新聞の発刊された1879(明治12)年か

ら、第5回内国勸業博覧会が開催され京都の鴨川納涼場でも遊びが近代化し始めた<sup>7)</sup>1903(明治36)年までの、実際に納涼営業していたと思われる6~9月および納涼店の出願に関する報道が多い5月の記事である。その結果、大川納涼に関する記事46件が収集でき、このうち14件が大川納涼場の移動・交通、アクティビティに関連した記事であった。また、各記事の情報の補完のため、納涼について記した旅行記、あるいは戦後に記された郷土史研究の成果も参考にする。

### 2. 大川納涼場と外の遊所とのつながり

大川納涼場を利用する客の交通手段は、主に徒歩、人力車、通船だったと考えられるが、中でも「通舟」は、大川納涼の賑わいを形成する一因となったものと推測される。1883(明治16)年の記事<sup>8)</sup>によると、通舟の通常料金は30銭~50銭に設定されていたといい、比較的に安価に利用できる、現在のタクシーのような存在であったと考えられる。

大阪の堀川の通船の船着場は、大半が橋付近に設けられた。これは橋が陸上交通と水上交通の交差点であり、人々の集積するポイントであったためと考えられる。現に、1903(明治36)年に登場し大量輸送の草分けとなった巡航船<sup>9)</sup>の船着場<sup>10)</sup>は、図-1に示す。

また当時の大阪では各地に遊所があり、その近辺の橋上は納涼店で賑わっていた。橋上納涼店の記事によく名が出てくる橋は、戎橋、難波橋、大江橋、心齋橋、新町橋、日本橋、天神橋の7つであり、このうち戎橋、大江橋、新町橋、日本橋は近くに遊所があった(図-2参照)。後年に取りまとめられた郷土誌にも、「夏には道頓堀川の七つの橋々の上には、細い涼み床几を欄干際に並べ、甘酒やあめ湯をひさぐ茶店が店を開いた。大川へ

涼みにいく客のために、岸の古びた格子造りのお茶屋から芸妓末社が飲食物を、遊船に運ぶ姿はなまめかしく、廊情緒の濃い地域であった<sup>11)</sup>という記述や、「東横堀川は東堀一二浜といわれたように、川船による荷役作業がさかんであった。夜ともなれば、東横堀には納涼の遊山舟が浮かべられ、大川へ繰出した<sup>12)</sup>という納涼風景の回想がみられる。市内各川筋の船着場から納涼客を大川に招き、面的な賑わいがあったと考えられる。

### 3. 大川の納涼客の遊び方

実際に大川納涼場で遊んだ納涼客の足取りを紹介する。1883(明治16)年の記事<sup>13)</sup>には、大川納涼場でひとしきり遊んだ客が、深夜に赴を変えようと茶臼山へ蓮見に向かうという描写が確認された。一行は、大川から船を漕ぎ出した途中で上大和橋の下手に船を付け(図-2参照)、居合わせた三艇の腕車に乗り天王寺の方へと向かっていった。仲居や芸妓を連れていたことから上級階層の遊びと考えられるが、大川納涼から茶臼山という回遊ルートを確認できた。

また、特殊な事例ではあるかもしれないが、1894(明治27)年の雑報記事<sup>14)</sup>には、花街の仲居が個人としてその場で船を調達し、料亭から酒肴も用意し、客を楽しませたとの記載も確認された。このように大川納涼では、遊客からの依頼を受けた貸座敷などが船や料理などを準備し、川へ送り出していたものと推測される。

外の遊所である水際の花街は、夏季期間中に水辺空間で催しを行っていた。例えば1892年の雑報<sup>15)</sup>には「毎年盆前後には南五花街にて何なりとも景気よる催しをなす筈なれど本年は川中へ涼み臺を設けしのみ企てもなければ九郎右衛門町の植田某が発起となり太左衛門橋より戎橋の間にて来る二十五日より九月三十日まで毎日午後六時より十二時まで川一杯の細工花火十二番

を炊く事に決し…(後略)」との記事がある。加えて同年の雑報<sup>16)</sup>には、この涼み台の上で行う催し

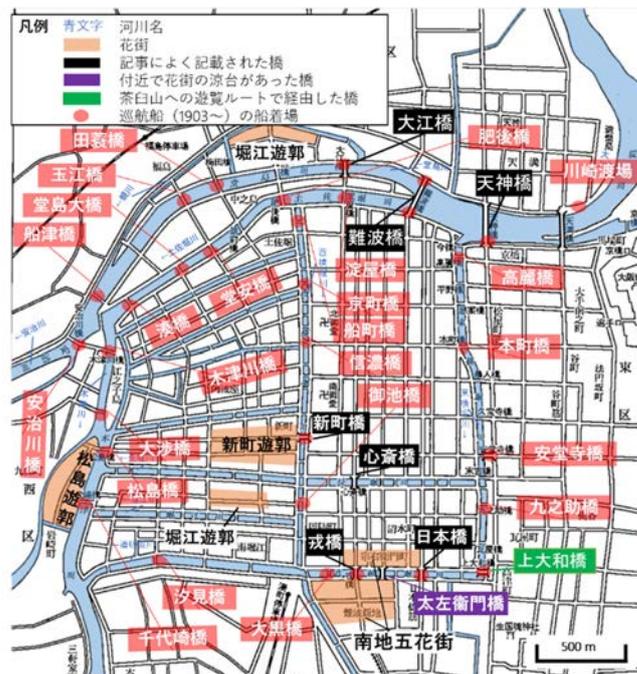


図-1 橋上納涼店が出店されていた箇所(1900年) (「明治・大正大阪百景」より抜粋、筆者加筆)<sup>17)</sup><sup>18)</sup>

の詳細が「絹に紫ぼか中央十間し秋草模様の揃を製し戎橋より豊屋町筋まで二十二間(36.4m)の涼臺を舞台とし、左右を囃子の場となし浜地の芝生に腰かけを据えて見物人の場所とする趣向にて目下準備最中なり(後略)」と説明されていた。要約すると、道頓堀川に接続する南地五花街(道頓堀橋町、九郎右衛門町、南阪町、難波新地一〜四番町、宗右衛門町)は夏季期間中、集客目的のために川中に涼み臺を設置しており、その周辺で仕掛け花火を打ち上げ、かつ涼み台を川中の芸妓らのステージとして見物できるように、浜地に腰かけられるスペースを設けていたようである(図-1参照)。

### 4. 結論

以上のように、大川納涼場が市内各所の遊所を潤しており、つながりによって面的な賑わいが形成されていたことが確認できた。

1) 水都大阪コンソーシアム：水都大阪の歴史—プロジェクト10 例道頓堀川エリア、[https://www.suito-osaka.jp/special/history/history\\_11\\_10.html](https://www.suito-osaka.jp/special/history/history_11_10.html)、閲覧日2023年7月29日  
2) 明倫翁、松川半山：瀬川兩岸一覽 上り船・下り船之部早稲田大学図書館古典籍総合データベース、2021年11月6日  
3) 大阪朝日新聞1893(明治26)年07月16日「川開という事について」  
4) 高安月郎(いさか)著：「畿内見物 大阪の巻」、金尾文雄堂、pp.20-21, 1911  
5) 中之島尋常小学校創立六十五周年記念会・中之島幼稚園創立五十周年記念会：中之島誌、臨川書店、pp.697-698, 1974  
6) 林倫子：大阪大川中洲納涼場の開設経緯と営業実態、景観・デザイン研究 究論叢書集、No.15, 2019  
7) 林倫子：京都御川川中における明治初期の夏期納涼営業の変遷—日出遊開・京都日出遊開の記事を中心に—、土木学会論文集D1(景観・デザイン)、Vol.71, No.1, pp.26-36, 2015

8) 朝日新聞1883(明治16)年07月26日「例年の通りで云」  
9) 野村廣太郎画、宮本又次：明治・大正 大阪百景、保育社、p54, 1978  
10) 前掲7)pp.581-583  
11) 篠崎昌美：「大阪文化の夜明け」、朝日新聞社、pp.94-102, 1961  
12) 松本博：「大阪の橋」、松籟社、pp.186-187, 1987  
13) 朝日新聞1883(明治16)年08月07日「是は二三日前の事な……(蓮見の宵待、化け物騒動) <画>」  
14) 朝日新聞1894(明治27)年08月04日「中居のお村」  
15) 朝日新聞1892(明治25)年08月23日「細工花火」  
16) 朝日新聞1892(明治25)年08月28日「遊部の催し物」  
17) 前掲8)  
18) 加藤政洋：花街 異空間の都市史、朝日新聞社、p.237, 2005